様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月 11 日現在

機関番号：32708
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７６０４５５
研究課題名（和文）　２０世紀初頭ドイツ、オーストリアにおけるミュージアム建築計画に見られる伝統と近代の相克

研究課題名（英文）　The conflict between tradition and modernity in the museum architecture projects in the early 20th century in Germany and Austria

研究代表者
海老澤　模奈人（EBISAWA MONADO）
東京工芸大学・工学部・准教授
研究者番号：40410039

研究成果の概要：　本研究では、20 世紀初頭のドイツ、オーストリアにおけるミュージアム建築計画の状況を、この施設にとって重要な歴史・伝統に対する意識と、この時代の建築一般において高まる近代化の意識とのせめぎ合いに着目しつつ、調査・考察した。その内容は、全体像の整理と３つのケーススタディーからなり、後者では、ウィーンの分離派館、ミュンヘンのドイツ博物館、既存建築のミュージアムへの転用事例、を扱った。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is to analyze the museum architecture projects in the early 20th century in Germany and Austria, focusing on the conflict between traditional-historical elements and modern elements appeared in the museum architecture planning at that time.　The study consists of two parts, namely the perspective of the whole of the museum projects and three case studies, dealing with the pavilion of the Wiener Secession, the Deutsches Museum in Munich and the conversion examples of historical architecture into museum.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	600,000	0	600,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,600,000	300,000	1,900,000

研究分野：建築史・意匠
科研費の分科・細目：建築学，建築史・意匠
キーワード：近代建築史、ミュージアム、ドイツ：オーストリア、展示、記念物保護

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、2003 年に博士論文「19 世紀ドイツ、オーストリアにおけるミュージアム建築（美術館・博物館建築）の展開に関する研究」をまとめた。その内容は、19 世紀のドイツ、オーストリアで建設されたミュージアムのための専用建築を体系的に調査し、その展開の様相を明らかにするものであった。本研究課題はこの博士論文の続編に位置づけられるものである。

上記博士論文では、ドイツのミュージアム建築が、ミュージアムという施設・制度の多

様化や建築的な流行の変化に影響を受け、19 世紀末に新しい形式を模索するまでを論じた。その状況を表す例として、19 世紀終盤から 20 世紀初頭のドイツに現れた折衷主義的な様式表現をもつ「集積型」というミュージアム建築の形式に着目し、それが 19〜20 世紀転換期に隆盛しつつも、短命に終わる様子を明らかにした。その考察に基づき、上記博士論文では、歴史様式の折衷を極めたこの「集積型」を、19 世紀と 20 世紀のミュージアム建築の橋渡し的な存在と位置付けた。そして 20 世紀に入ると、「集積型」の短命に象徴されるように、ミュージアムの建築計画においても次第に脱歴史化の傾向が進むことを示唆した。

本研究課題では、この問題意識を継続し、20 世紀初頭のミュージアム建築が、伝統と近代のせめぎ合いの中で、次第に歴史的な表現を喪失していく過程を考察しようと考えた。

２．研究の目的

(1)　20 世紀初頭のミュージアム建築の展開過程と特徴の解明

20 世紀初頭の多様化するミュージアム建築計画の中で、この施設にとって不可欠な歴史・伝統に対する意識と、この時代の建築一般において高まる近代化の意識とが、いかに葛藤していたかを考察し、この時期のミュージアムというビルディングタイプが持つ意味を明らかにすることを目的とする。研究代表者は、長期的な展望として、19、20 世紀におけるミュージアム建築の成立と展開を詳細に論じることを目標としており、本研究はその一部となる。

(2)　20 世紀初頭の建築の状況に関する新たな史実と解釈の提示

多くの近代建築史叙述が、20 世紀前半の建築の変容を、建築家による自己表現の確立や、新しい構造技術・材料の発見というかたちで、言わば発展史的に語るのに対し、本研究では、ミュージアムという施設においてとりわけ強く見られる伝統と近代のせめぎ合いにこそ注目し、この時代の建築史研究に新しい解釈を提示することを目指している。その点で本研究は、単に一つのビルディングタイプの展開過程の解明にとどまるものではなく、その分析を通して、この時代の建築の本質に通じる、より普遍的な問題を考察しようと試みるものでもある。

３．研究の方法

総論「(1)20 世紀初頭のミュージアム建築計画の全体像の整理」と各論「(2)20 世紀初頭のミュージアム建築に特徴的な傾向を表すプロジェクトに関するケーススタディー」の両面から、この時代のミュージアム建築計画の解明に取り組む。

(1)　20 世紀初頭のミュージアム建築計画の全体像の整理

20 世紀初頭のドイツ・オーストリアにおけるミュージアムの建設事例をリストアップし、その基本的な情報を収集・データ化する。そしてその中からこの時代特有の傾向を整理する。具体的には、同時代に出版された建築雑誌などの一次資料と、関連テーマに関する近年の研究やミュージアムのガイド・目録、記念物目録などの二次資料を総合的に活用し、リストアップと情報収集を進めていく。さらに現地調査において、可能な限り建築事例を実地で観察し、写真撮影や歴史的資料との比較考察を実施することで各プロジェクトの特徴の把握に努める。

(2)　20 世紀初頭のミュージアム建築に特徴的な傾向を表すプロジェクトに関するケーススタディー

年度ごとに異なるテーマのケーススタディーを実施する。いずれも、プロジェクトの成立過程で伝統と近代との間で葛藤が見られるものであり、そこにどのような建築史的意味が見いだせるかを実証的に考察する。各年度の対象は以下のようになる。

平成 19 年度：ウィーンの分離派館
平成 20 年度：ミュンヘンのドイツ博物館
平成 21 年度：既存建築のミュージアムへの転用事例

それぞれのケーススタディーのために、夏期に現地調査を実施する。史料館・図書館での資料収集と実地での建築調査を行い、収集した資料を年度後半に分析し、とりまとめる。

４．研究成果

(1)　20 世紀初頭のミュージアム建築計画の全体像の整理

同時代の建築雑誌や先行研究をもとに、1900〜1920 年代にドイツ、オーストリアで建設された主なミュージアム建築をリストアップし、基礎資料の収集を行った。その内現存する主要な 16 例について、2007、2008、2009 年の現地調査で訪問し、実地での観察と写真撮影を行った。

以上の調査を通してわかったことは以下の諸点である。

①　新築事例として約 30 作品が認められた。これらの事例に見られる特徴として、以下に挙げるような諸傾向が指摘できる。

② 建築造形的には、ハレの先史ミュージアム（1911-12）やハンブルクのクンストハレ（1912-21）のように、新古典主義的な造形に回帰する事例が目立つ。また、マンハイムのクンストハレ（1906-07）のように、装飾的細部は簡略化されながらも、厳格なシンメトリーの建築構成によって古典主義的な性格を示す例も見られる。

③ 19-20 世紀転換期に隆盛した集積型ミュージアムの系譜に位置づけられる事例も認められる。主なものでは、シュパイヤーのプファルツ歴史ミュージアム（1907-10）、シュトゥットガルトのリンデン・ムゼウム（1910-11）、ニュルンベルクの交通ミュージアム（1925 開館）がある。これらは左右非対称のいわゆる「絵画的」な建築構成を取る点において、集積型のイメージを残すものである。ただし 19 世紀末に見られたような、多彩な歴史様式から構成される折衷主義的性格は薄まっている。他方、集積型の特徴の一つであった展示室における歴史的空間の再現展示は、上記の例に限らず、ミュンヘンのドイツ博物館（1909-25）など他の事例でも見られる。またヴィースバーデンのヘッセン州ミュージアム（1911-20）では、アーヘンの宮廷礼拝堂（9 世紀）を模した八角形のホールが取り込まれるなど、歴史的モティーフをミュージアム建築内に取り入れようとする姿勢は、事例によっては依然強く見られる。その点では、ミュージアム建築と歴史との結びつきは 20 世紀に入っても一つの流れとして継続していたことが指摘できる。

④ 表現主義もしくはアール・デコの造形を取り入れたライプツィヒの新グラッシムゼウム（1925-27）や、モダニズム風のドイツ衛生ミュージアム（1928-30）など、新しい建築造形を実践する例も見られる。ただしそれらの事例でも平面構成は左右対称の保守的なものであり、建築計画的に見て新しさを示すわけではない。

⑤ ミュージアムのタイプでは、科学技術、交通、衛生、先史、軍事など、それまでなかった新しい分野を対象とした事例が登場するのが特徴である。また、それまでの絵画館とは異なる、同時代芸術を中心に扱う芸術展示館が多く建設されている。その他では、19 世紀後半から増加していた地方史・文化史を対象とするミュージアムがいくつか認められる。

⑥ ヘルマン・ビリング、テオドール・フィッシャー、フリッツ・シューマッハー、ヴィルヘルム・クライスなど複数のミュージアムを設計し、ミュージアム建築の専門家と見なせるような建築家が目立つようになる。

⑦ 新築事例とは別に、歴史的建造物をミュージアムへ転用する事例も同時代の建築雑誌やミュージアム専門学術誌でしばしば取り上げられている。この点については、(4) のケーススタディーで調査した。

(2) ウィーン分離派館についてのケーススタディー

2007 年夏の現地調査で、ウィーン分離派館史料室を訪問し、建築家 J.M.オルブリヒのオリジナル図面の閲覧・撮影を行った。また非公開のトップライトの小屋組を視察するとともに、装飾など建築細部を観察した。その後、オルブリヒ設計によるダルムシュタットの芸術家コロニーの建築群を訪問し、彼の展示建築の展開を考察した。その成果をもとに、学会発表③と論文①を執筆した。その要旨は以下である。

ウィーン分離派館においては、一般に、ファサードに集約された建築造形の斬新さや、さまざまな展示形式に対応するニュートラルな展示空間が注目される。一方、展示室に光を供給するトップライトの造形についてはほとんど論じられない。本研究では、このトップライトの機能性と外観との関係に注目し、その歴史的な意味を考察することを試みた。

まず竣工後の分離派館に対する評価を検討した結果、このトップライトは機能面では高い評価を受けながらも、機能をストレートに造形化した即物的な外観には批判の目が向けられていたことがわかった。この批判のルーツを辿るべく、19 世紀の展示建築のトップライトを検討してみると、多くの場合、トップライトのガラス屋根が外観において目立たないように造形されていることがわかった。その点で分離派館のトップライトは異質のものだった。

続いて分離派館の計画案におけるトップライトの扱いを検討してみると、第１案から第２案へ移る過程で、より機能性を重視した大規模なトップライトが設置され、それがストレートに外観に表現される傾向が強まっていたことがわかった。その造形は、ファサードの象徴性と展示空間の実用性を明確に分けようとした当時のオルブリヒの設計姿勢の現れだったと考えられる。

さらにオルブリヒの展示建築の展開を考察すると、分離派館以降、トップライトの機能性と外観表現との関係が変化していき、最後のダルムシュタット市立展示館では両者の調和が図られていることがわかった。つまりウィーン分離派館のトップライトは、機能性と外観との関係を模索したオルブリヒの試みの途上にあるものだったと言える。しか

し見方を変えれば、機能をストレートに表出したその造形は、ダルムシュタットの展示館以上に時代を先取りする新しさを示すものだったとも解釈できるのである。

(3)　ドイツ博物館についてのケーススタディー

2008 年夏のドイツ調査で、ドイツ博物館史料室を訪問し、資料調査を実施した。成立期の博物館の管理報告書を閲覧し、写真や図面などの所蔵資料を複写した。あわせて建築を実地に観察し、資料との比較を行うことで、成立期のドイツ博物館についての復元的考察を進めた。その成果の一部として、学会発表②を行った。その要旨は以下である。

1906-25 年にミュンヘンに建設されたドイツ博物館は、当時ほとんど前例のなかった科学技術を対象としたミュージアムであり、その建築もミュージアム建築としての新しい形式を模索するものであった。ミュージアム建築の展開上興味深いのは、この建築の設計者が、19 世紀終盤に隆盛した「集積型」の実践者ガブリエル・フォン・ザイドルであるという点である。本研究では、図面や同時代の雑誌記事などをもとに、当時ミュージアム建築のスペシャリストと目されていたザイドルが、どのようなイメージをもって新しい建築課題に取り組んだのか、またそこで「集積型」の形式はいかに継承されたのかを考察した。

ザイドルの初期案は、外部造形や配置計画から見る限り、かつての集積型のイメージを離れ、むしろ造形の簡素さが特徴的な新古典主義風の建築としてまとめられていた。その後の計画案の発展過程に見られるのは、科学技術の展示という特殊な機能に対応するように、採光や展示空間の効率的利用を求め、実用性を重視する姿勢である。

1925 年に竣工した建築では、飛行機や重機などの大規模コレクションの展示のために、鉄筋コンクリート構造による開放的な空間が創出されていた。それは同時代のドイツでも先駆的なものであったと考えられる。そのような近代的性格の一方で、化学や楽器コレクションの展示室では、ザイドルが集積型で実践した歴史的建築空間の再現展示も導入されていた。その点で、ミュージアム建築と歴史との結びつきは、ドイツ博物館のような新しい型の提案でも失われることはなく、むしろ部分的には積極的に採用されていたことが指摘できる。

(4)　既存建築のミュージアムへの転用事例に関するケーススタディー

2010 年夏のドイツ調査において、リューベック、フライブルク、ハイデルベルク、アウクスブルクに残る、歴史的建造物のミュージアムへの転用事例を訪れ、実地での建築の観察と写真撮影、関連資料の収集を実施した。さらに当時の雑誌記事等、各事例に関する基本資料をミュンヘン美術史中央研究所等で補足収集した。収集したテキストを分析し、当時の転用事例に見られる諸傾向を考察した。その成果の一部として、学会発表①を行う予定である。その要旨は以下である。

1900～1910 年代のドイツ、オーストリアでは、歴史的建造物をミュージアムへ転用する事例がしばしば見られるようになる。それらは、当時の代表的な建築雑誌『ドイツ建築新聞』や 1905 年創刊の『ミュージアム学』などで紹介されている。その中でも代表例と見なせる 11 例を対象に、記事の文章を分析すると、転用の根拠として以下の４点が認められた。すなわち、「１. 歴史的建築の保護」「２. 歴史的な建築空間の評価」「３．市の中心部という立地の評価」「４．費用的な問題」である。１と２は、歴史的な建造物のもつ魅力やその歴史的な意義への積極的評価であり、３と４は、既存建築ゆえの実際的な利点を主張するものであった。３、４に比べて、１、２に対する評価の方が記事では声高に主張されており、20 世紀初頭における歴史的建造物保護に対する意識の高まりを反映するものと考えられる。このような転用事例への注目は、当時、ミュージアムというビルディングタイプにおいて、新たな建築イメージが形成されつつあったことを示しているのではないか。

(5)　今後の展望

本研究は、研究代表者が継続的に行っている、19～20 世紀初頭ドイツ、オーストリアにおけるミュージアム建築の展開に関する研究の一部をなすものである。対象とする事例の広範さ、視点のユニークさという点で、同様の研究は、現地ドイツ・オーストリアにおいてもなされていない。その点で、本研究の継続およびその成果の発表は、基礎的な研究成果として、学術的な意義を有すると言える。なお、総論「20 世紀初頭のミュージアム建築計画の全体像」と、学会発表にとどまっている二つのケーススタディーについては、今後学術論文としてまとめ、総合的な成果を提示したい。

本研究の遂行によって、19 世紀から 20 世紀初頭までのドイツ・オーストリアにおけるミュージアム建築の展開状況を一通り把握することができた。今後の展望として、二つの方向性を考えている。一つは、19、20 世紀のドイツ、オーストリアのミュージアム建築計画に見られる個別テーマを掘り下げていくことである。具体的には、本研究のケーススタディーでも扱った、ミュージアムにおける採光方法とその設備に関する歴史的な考

察である。このような技術的側面からのミュージアム建築研究は未だ十分になされていない。もうひとつは、近代日本で建設されたミュージアム建築をドイツ・オーストリアの先例と比較しつつ考察することである。これまでの研究代表者のミュージアム建築に関する研究の蓄積が、日欧比較建築史研究に新たな成果をもたらすことができるのではないかと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 海老澤模奈人、ウィーン分離派館のトップライトに関する考察：その機能性と外観の関係をめぐって、建築史攷、査読有、2009、pp.117-148

② 海老澤模奈人、19 世紀ドイツ・オーストリア建築史研究、建築史学、査読無、No.53、2009、pp.109－130

③ 海老澤模奈人、1867 年ウィーン宮廷ミュージアム建設設計競技に見るミュージアム建築像、日本建築学会計画系論文集、査読有、No.628、2008、pp.1371-1378

〔学会発表〕（計 5 件）

① 海老澤模奈人、20 世紀初頭ドイツにおける既存建築のミュージアムへの転用事例、日本建築学会大会、2010 年 9 月（発表予定）、富山大学

② 海老澤模奈人、ドイツ博物館の成立過程に見るミュージアム建築像、日本建築学会大会、2009 年 8 月、東北学院大学

③ 海老澤模奈人、ウィーン分離派館の成立とトップライト、日本建築学会大会、2008 年 9 月、広島大学

④ 海老澤模奈人、ベルリン博物館等建設設計競技について、日本建築学会関東支部研究報告会、2008 年 3 月、東京

⑤ 海老澤模奈人、1830-1860 年代のドイツ、オーストリアにおけるミュージアム建築の展開：建築様式と平面構成に見られる諸傾向、日本建築学会関東支部研究報告会、2008 年 3 月、東京

〔図書〕（計 1 件）

① 長澤泰他編、朝倉書店、建築大百科事典、2008、pp.518-519（「ミュージアム．都市の記憶継承の場として」）

６．研究組織
(1)研究代表者
海老澤　模奈人（EBISAWA　MONADO）
東京工芸大学・工学部・准教授
研究者番号：40410039